



えだわんだより

令和5年9月29日発行

横浜市立荏田東第一小学校

10月号

学校ホームページ



共に伸び、共に輝け、感謝・感動 しなやかえだわん

「考えの表出」が秘める可能性

学校長 熊谷 潤平

今年ほど「暑さ寒さも…」という言葉で、多くの方が思い浮かべ、あるいは多くのメディアが取り上げた年はないのではないのでしょうか。

暑さ寒さも彼岸まで…春秋の彼岸を機に寒暖が変わるものなのだの意。

※彼岸…①向こう側の岸。②仏教で、悟りの境界に至ること。涅槃（ねはん）の境界。③春分・秋分の日を中日として、その前後の七日間。

(小学館 日本語新辞典より)

もしかしたら今日、全国多くの学校便りでもこの言葉が取り上げられているかもしれないな…とも思います。なにせ古（いにしえ）からの言い伝え・言い習わしもどこ吹く風。容赦なく、彼岸過ぎにも連日真夏日がやってきているのですから。

そんな中、9月27日に5年生が、みなとみらいホールでの「心の教育 ふれあいコンサート」へ、28日に2年生が、ズーラシアへ行ってきました。気温が30度を超えても元気に歩き、無事に帰校した両学年の子どもたちを褒めてあげたいです。

私は、5年生と一緒に、神奈川フィルハーモニーのプロの技・迫力を堪能してまいりました。5年児童に取材をすると、

「思ったより、知っている曲がたくさんあったよ。」

「ぼくは、みんなと一緒に歩いて、みんなと電車に乗って、コンサートに行けたのがとても楽しかった。」

「一番心に残ったのは『威風堂々』！」

「最後のアンコールの曲（J. シュトラウス1世『ラデツキー行進曲』）が一番よかった！ みんなで拍手して演奏に参加できたのが楽しかったから。」

…とのこと。生き生きとした素朴な声は、彼岸過ぎの猛暑をも吹き飛ばしてくれます。

さて、こうした子どもたちのように、素直な心の声・考えを表出する活動というのは、とても大切で、注目すべき成果を上げている学校群があることを、ある研修で学びました。講師は国立教育政策研究所の学力調査官・教育課程調査官の渡辺誠先生です。渡辺先生は、横浜市の小学校で、子どもを引き付け、力を伸ばす楽しい授業を何年もされてきた方です。

この研修の中で、様々な違い（家庭における通塾の有無、所得、学歴等）に関係なく、違いを克服し、一定の学力を保障している学校は、

考えを表出する言語活動が多い

という事実が紹介されました。さらにこうした学校において、高学力（あくまで全国学力・学習状況調査において測定した力）を達成している児童は、①朝食摂取 ②自己肯定感 ③絵本の読み聞かせ ④ICT活用の有用性認識 ⑤学級での対話 ⑥教科学習の有用性認識（国語は役に立つ、等）の項目が高いという特徴があるとのことでした。

前述の5年生たちは、生き生きと、自分の言葉で「思い・考え」を表出してくれました。こうした**考えを表出する言語活動**を、日常にも教育課程にも、さらに意図的に、豊かに設定していきたいと思えます。

しかしながら、ここで問題が出てきます。考えの表出はいいけれど、そもそも「考えを持ってない」場合はどうするのか。難しい問題です。様々な事象・文章・番組等に出会うたび、まずは大人が子どもの目を見て、「私はこう思うよ。こう考えるよ。」と繰り返し語るところからでしょうか。実感を込め、何百回でも、何千回でも。とりわけ我々教職員は、誰より、「考えを表出する人の手本」たるべく精進せねば、と自戒するところです。